

『山路の露』の語りと思想(付『山路の露』転換の論理)補訂)

中井 賢一

はじめに

A これは、かの光源氏の御末の薰大将と聞こえし御あたりのことなれば、その続きめいたるこそ、いとかたはらい
たう、つづましけれど、ゆめゆめさには侍らず。ただ、かの小野の里人(≡浮舟)に、たづねあひたりしありさま
となく、筆のすさみに書き置き侍る、その人の心にも、さこそ人には漏らさざりけんを、かりそめなる旅の空にて、
主さへはかなくなりければ、「あだなる人の、その行く末をとぶらはん」とて、藻塩草かき集めけるそぞろごと
ども、みなえり出でて、経の紙にすかせけるついでに、これを見つけ、「何の聞き所ある節もなければ、『果て
いかならん』と思ひわたる人の行く方なりける」と見るばかりの、せめてをかしさに、残し置きけるにやあらん。

(二六一頁)^(注1)

ア これは、源氏の御族にも離れ給へりし、後の大殿(≡鬚黒)わたりにありける悪御達の、落ちとまり残れるが、
問はず語りしをきたるは、紫のゆかりにも似さめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末ぐに、ひが事ど
ものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもり、ほけたりける人のひがことにや」などあやしがりける、いづ
れかはまことならむ。

(竹河卷二五二頁)^(注2)

Aは『山路の露』、アは『源氏物語』竹河巻、いずれも冒頭に設置された、それぞれ後続の物語へと誘導する語り手の前口上であり、両「後続の物語」の序として機能している。^(注3)これらは、他にも、「後続の物語」からは独立した「序の語り手」が設定されている点、「後続の物語」よりも下った時点で「序の語り手」がそれらを紹介する形式が採られている点、「序の語り手」によって「これは……」に発して「後続の物語」の由来が明かされる点、また、その途上、「後続の物語」の語り手の属性などが詳述され、重層的な伝承が演出される点等において共通し、更に、Aでは、**点線部**、『源氏』の続編ではないこと、アでは、同じく**点線部**、「紫のゆかり」の伝える、主に匂宮巻の物語内容と合致しないこと、いわば、いずれも「先行の物語」との異質性を進んで自認する「序の語り」となっていることも酷似している。『山路』の「序」が、『源氏』竹河巻のそれを下敷きに成立していることは動かないだろう。^(注6)

ただ、Aとアを詳細に比較した時、Aには、それら照応関係とは相容れない、アとは極めて対照的な設定が施されていることに気付く。Aからは、**傍線部**、薫が「かの小野の里人」浮舟に「たづねあひたりしありさま」や、薫、浮舟の「こなたかなたの御気色」を「くはしう見ける人」が、「後続の物語」の語り手として設定されていることが知られる。なお、同語り手は、「後続の物語」の始発部たる「かの、はかなかりし蜻蛉の行く方……」(二二二頁)の筆致より、且つ、『源氏』、『山路』いずれの物語世界をも経験した人物でもあるとおぼしい。^(注7)対して、アからは、同じく**傍線部**、薫ら「源氏の御族」から「離れ給へりし」鬚黒郎「悪御達」で、事実、薫の出生の秘事を知らない人物(竹河巻二六一頁等)が、「後続の物語」の語り手として設定されていることが窺える。つまり、両「後続の物語」を展開させるに当たり、『源氏』がアを通して、薫を知悉し得ず、薫の生きる物語世界に薫と共にあり得ない視座の語り手、いわば、薫から遠い距離の語り手を配したのに対し、『山路』はAを通して、薫を知悉しうる、薫の生きる物語世界に薫と共にありうる視座の語り手、いわば、薫に近い距離の語り手を配しているの^(注8)であり、薫に対する語り手の視座が、正に遠近対照的なのだ。

前述のごとく、様々な共通項を有し、その影響関係も明白で、また、共に「先行の物語」との異質性をも、その「序」で自ら標榜するにも関わらず、何故、『山路』は、その語り手を『源氏』竹河巻と対照的な近い距離に配置しているのであろうか。この点に着眼した先行研究は見当たらない。

また、旧稿にて、『山路』は、『源氏』における薫の浮舟の求め方や、それに関わった物語終局のあり方について、一種、否定的な立場にあることを指摘した。^(注9)このことと、『山路』の近い距離の語り手とは、何らかの関係があるのか。

本稿は、旧稿での検証を踏まえつつ、『山路』の「近い」語りの意義と、それを支える思想について考察するものである。

一 『山路の露』の思想

旧稿二編での検証内容について、本稿と関連する事項のみ、以下に確認しておく。それら拙稿は、いずれも、『源氏』と『山路』の相違についての分析を元に、『源氏』に対する『山路』の位置がいかにあるか、測定を試みたものである。

まずは一編目^(注10)、『源氏』において、宿木巻以降、薫は大君の形代として浮舟を求めることになるが、かかる薫の「願望」に呼応し、宇治中君は、自らへの薫の懸想を逸らす狙いも相俟って、また、浮舟の母中将君は、浮舟を貴人と結ぶに足ると見る矜持も相俟って、いずれも薫と浮舟との縁談を進め、「願望」実現のため、種々、差配を果たすことになる。他にも、身分不相応の浮舟を求める薫のために仲介に動く弁尼や、出家後の浮舟をも求め続ける薫に応じて浮舟の還俗を勧奨する横川僧都等、浮舟を求めている事実を公にはしたくない薫の、それでも浮舟を求めようとする「願望」を叶えるべく、諸事を差配し、あるいは、代行するルートが、『源氏』においては複数機能している。対して、『山路』においては、同じく浮舟を求める薫の「願望」について、宇治中君は、そもそも薫のほうが、匂宮の存在への懸念ゆ

えに浮舟に係る相談を持ち掛けることすらできない状況にある。また、中将君は、自身での浮舟引き取りを思い、横川僧都は、信仰重視の時代背景も関わってか、還俗非勸奨の人物としてあり、弁尼も、横川僧都同様とおぼしき条件下にあつて、いずれも、仮に薫から「願望」実現のための協力要請があつたとしても、それを叶える向きに動き得ない現況へと転じている。つまり、『山路』に至り、薫は、自らが表立って動かずとも都合良く機能した「願望」実現のルートを喪失するのである。いわば、『山路』は、薫が味方を失い孤立するに至る条件を整備することで、『源氏』において多元化していた、浮舟を求めることの責を、薫その人の下へと一元化しているのである。

象徴的な一例として、中将君の変化について挙げておく。『源氏』において、中将君は、薫を垣間見た際、「天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、我むすめは、なのめならん人に見せんはおしげなるさまを……」（東屋巻一五二頁）と、前述の通り、浮舟矜持の念ゆえ、薫との結縁を願って、宇治中君の推し進める縁談に乗じ、「かゝる人の御あたりに馴れきこえんは、かひありぬべし」と同意の上で、「たゞ御心になん」と一任していた（東屋巻一五二頁）。ところが、『山路』にあつては、次のBのごとく、変容している。

B 「…おぼつかかなからぬ所へ、いかでわたし侍らん。昔、かの時々隠ろへ給へりし、あやしの宿はおぼえ給ふや。所はいと広く侍れば、さりぬべきさまにつくろはせなして、わたし聞こえんと思ひ侍るを、大將殿（＝薫）のいみじう忍ぶべくのたまへば、それもいかかと憚られ侍るも、などか人の知るべき、忍びてこそはと思ひ給ふる」など、
 （中将君は浮舟に）泣く泣く聞こゆ。
 （三〇二頁）

浮舟と再会した中将君は、前半の傍線部、浮舟を「おぼつかかなからぬ所へ、いかでわたし侍らん」と考え、「かの時々

隠ろへ給へりし、あやしの宿」、即ち、「三条わたり」の「小さきいゑ」（東屋卷一六七頁）への引き取りを提案する。再び薫に浮舟を依託しようとは微塵も思わないことも注目されるが、更に留意すべきは、中将君のこの意向が、同じく浮舟と再会した後に薫が着想した「近きわたりの山里を、さるべくしなして、忍びつつ渡してん」（三〇八頁）との計画と競合するものであることだ。しかも、中将君は、後半の傍線部、薫が「いみじう忍ぶべくのため」うので三条の小家への引き取りは「いかかと憚られ」るものの、「などか人の知るべき」、こっそり「忍びて」事を運ぼう、と薫の懸念を無視した秘密裏の強行まで想定しており、中将君が、薫と対峙的な心性の人物へと移行していることは明らかである。『山路』が、中将君を薫の「願望」^(注1)から切り離すべく展開していることは動くまい。

如上、『山路』は、薫が浮舟を求めらるることに関与する人物を絞り込み、その責が薫その人へと一元化されるべく、周囲の条件を『源氏』当時から更改している。このことは、『源氏』における、「願望」の張本人薫が自ら手を下すこともなく浮舟を求めらるるあり方、あるいは、浮舟を求めらるることの責を薫以外の周囲にまで分散させる展開のあり方について、改めて問い直す、『山路』の、『源氏』に対する否定的姿勢の徴表と考えるべきである。

続いて二編目^(注2)、『源氏』大尾において、再会を迫る薫の書簡に「心ちのかき乱るやうにし侍るほど、ためらひて、いま聞こえむ。…」（夢浮橋巻四〇六頁）と反応し、以降、浮舟は「沈黙」したまま物語は閉じることとなり、浮舟が薫の元に戻るか否かが、浮舟がいずれの方向に「沈黙」後を生きるかによって決する構図となっている。対して、『山路』大尾においては、次に掲げるCのごとく、その様相は異なる。

C 「さても、これ（＝浮舟）をいかにもてなさまし。（中略）人も思ひ許しぬべかりし古へだに、なほ世の聞こえをつつみてこそおぼえぬ所に置きたりしが、今さら、もて出でなん、人のもの言ひも、方々あやしかりなん。さり

とて、かの山深き住まひに閉ぢ籠め果てなんも心苦しきを、いかにせまし。近きわたりの山里を、さるべくしなして、忍びつつ渡してん」など、心ひとつに思しまうけながら、女宮の御こと（＝女二宮の懐妊）を、誰も誰も、またなきことと思ひて、こちたき御祈りども、あたりあたり、さるべき家司など心のいとまなきころなれば、折節あしくて、「いささかのごとも、世の音聞きことごとしくや」など（薫は）思しやすらふ……（三〇七〜三〇八頁）

二箇所の傍線部の通り、浮舟を都付近に「渡してん」と思いつつも、「世の音聞き」を憚り、引き取りを「思しやすらふ」薫が描かれ、浮舟が薫の元に戻るか否かが、薫が引き取りを敢行するか否かによつて決する構図となつている。かかる構図は、『山路』に至り、自身の昇進等、浮舟を求めることがより困難な環境に変わつていく薫が、それでも変わらず浮舟を求め続けることでもたらされたわけであるが、つまり、『源氏』と『山路』は、浮舟が薫の元に戻るのか、出家生活を今のまま続けるのか、いずれの未来へと進むのかを決する担い手が対照的なのであり、『山路』は、いわば、「浮舟の未来」の決定権者を浮舟から薫へと転換しているのである。『源氏』、『山路』共に、浮舟が薫の元に戻るのか、小野での出家生活を続けるのか、確定させないまま幕を下ろすにも関わらず、『山路』が、かかる転換を通して、「浮舟の未来」の決定権者を浮舟から薫へと更改することからは、『山路』の、『源氏』終局に対するアンチテーゼとしての意義が窺える。『山路』は、「浮舟の未来」についての責を、「沈黙」に追い込まれた側の浮舟に負わせる『源氏』のあり方を否定し、「沈黙」に追い込んだ側の薫にこそそれを問い質すのであり、『山路』の「転換」は、さような『源氏』終局に対する異説提起として理解するべきである。

以上、旧稿二編を瞥見した。これらの検証内容と、『山路』が、『源氏』に引き続き浮舟を求める薫を描き、また、同じく「浮舟の未来」を確定させないままの結末に至ることに併せ鑑みるに、『山路』は、薫が、浮舟を求めて止まないことに

も、『源氏』の、薫と浮舟を巡る恋物語、いわゆる浮舟物語が、「浮舟の未来」がいかに開かれるかという命題に収斂することにも、十分理解を示した上で、しかし、『源氏』の、自ら動くことはない薫の浮舟の求め方や、「浮舟の未来」の責を担う決定権者に薫がならない人選等については、大いに疑念を抱いていると思われる。『山路』に、『源氏』の結末を追認する機能を見通す先行研究もあるが、^(注13)おそらく、事は単純な「追認」には留まるまい。いわば、『山路』は、あるべき薫の浮舟への対し方を呈示することで、『源氏』終局の、ある種、無責任にも映る薫像を相対化しつつ、^(注14)同時に、浮舟を求めることの責を薫に負わせることなく進行する『源氏』の、さようなあり方そのものについて、真っ向から否認しているのである。浮舟に対する責を薫に問わないまま一貫する『源氏』に対して異議を呈し、かかる『源氏』のあり方の相対化を図る発想、いわば、『源氏』否認の思想が、^(注15)『山路』には、これも一貫して流れている、ということになるだろう。

二 『山路の露』の語り

前節の通り、『山路』には、『源氏』否認の思想が底流しているとおぼしい。しかし、一方で、周知のごとく、明らかに『山路』は、『源氏』続編を擬した作品であり、『源氏』という存在を利用した、正に『源氏』に寄生する創作物^(注16)であることとは動かない。いわば、『山路』は、敢えて『源氏』と一連たる体を構え、『源氏』の物語世界の新たな一展開として『源氏』と共にありうることをその生成方法とした作品ということになるろう。だとすると、例えば、前に「薫を知悉しうる、薫の生きる物語世界に薫と共にありうる視座の語り手」を「薫に近い距離の語り手」と呼んだことに照らすならば、『源氏』の現行の物語展開なり、そこに生きる具体的な人物なり、いわば、『源氏』の「物語世界」を支える諸要素と、敢え

て共にあろうとする意味において、これも、ある種、『源氏』に「近い距離」の創作物、と見做さねばなるまい。が、しかし、さような作品が、前節の^(注17)とき『源氏』否認の思想を伏流させていることの意義は、極めて大きいのではないか。『源氏』に「近い距離」の創作物が、『源氏』否認に働くことの意味を、我々は、決して看過してはならないのではないか。即ち、「統編」であれば、基本的に、登場人物もその状況も、『源氏』の延長線上のものとして『源氏』の設定をそのまま承けることになろう。^(注17)必然的に、『源氏』の「物語世界」と重なり合う形で展開することになり、「統編」に新たに生じる『源氏』との懸隔は際立つことになる。^(注18)前述の『源氏』否認に係る『山路』の様々な更改は、『源氏』との懸隔として、一連ゆえに、明確に強調されうるわけである。

例えば、このことは、『源氏』と一連でない、人物も空間も別個の他作品の形で、「浮舟の未来」は薫にこそ問うべき、との発想の下、『源氏』終局のあり方の相対化を試みる作品があったとして、それと比較した時、自明であろう。『源氏』の薫でない誰かが、『源氏』の浮舟でない誰かの未来と向き合い、その責を担うに至る物語と、『源氏』の薫その人が、『源氏』の浮舟その人の未来と向き合い、その責を担うに至る物語と、今ある『源氏』へのアンチテーゼとしては、一、体、いずれが明瞭であり、また、効果的であるか、ということだ。^(注19)『源氏』と一連でない以上、『源氏』の各種設定とは当然重なり得ず、『源氏』の「物語世界」にその一展開として共にあることも無論叶わない。さような、いわば、『源氏』から遠い距離で、『源氏』を批判し、物語展開の更改案を呈示するよりも、『源氏』と一連の、『源氏』に「近い距離」で、それらを試みた方が、遥かに能率的であることは、言を俟つまい。^(注20)要するに、『山路』の構える「統編」の体は、『源氏』に「近い距離」にあればこそ際立つ懸隔を利用した、極めて効率的な『源氏』否認の手法なのであり、物語の最小限の敷衍を以て『源氏』のあり方の相対化を訴える、挑発的、且つ、したたかな創意と捉えるべきなのである。^(注21)思えば、『山路』は、「序」Aからも窺える通り、一作品としての『源氏』に組み込まれる類の「統編」ではないことを、先手を打って

弁明しつつ、同時に自らの存在意義をも巧みに表出するといった戦略性をもとより有している。^(注2) さような「したたかさ」は、かかる『山路』に十分想定されようと思うのである。

さて、では、そのことと『山路』の語りとは、何らかの関わりがあるのだろうか。既に見た通り、『山路』は、『源氏』否認の思想の下、『源氏』に描かれざる、あるべき薫の浮舟への対し方について効果的に呈示すべく、「続編」の体を利しているとおぼしい。だとすると、一連ゆえ、「続編」ゆえの「近い距離」を以て、『源氏』否認を図る『山路』が、『源氏』の薫像、就中、終局の「無責任」なその相対化のために、薫に「近い距離」の語り手を設定することは、至極当然なのではないか。『源氏』の「物語世界」にその一展開として『源氏』と共にありうることを以て、『源氏』否認を図る『山路』が、薫像の相対化のために、薫の生きる「物語世界」に薫と共にありうる語り手を設定することは、至極当然なのではないか。「はじめに」にも触れたごとく、『山路』の「後続の物語」の語り手は、薫と浮舟の再会などを「くはしう見ける人」で、且つ、『源氏』での両者の関わりをも把握する人物であった。つまり、『源氏』、『山路』を通じて、薫の浮舟への対し方を掌握し、就中、『山路』においては、直接薫に係る詳細を目撃した、薫の知悉者である。されば、必然的に薫の知悉者によって語られる『山路』の薫像には、大いに信憑性が出てくるのではないか。薫と共にありうる、薫の知悉者によって象られる薫の浮舟への対し方ゆえ、『源氏』同様に確かにあつた事実として説得力を帯びてくるのであり、いわば、薫に「近い距離」の語り手による語りゆえ、そこで呈示される、あるべき薫の浮舟への対し方は、『源氏』の「更改案」として、確と効力を発揮するのである。『山路』は、「くはしう見ける」語り手ならではの信憑性を強調、活用しつつ、効率的に『源氏』否認を成すのであり、これもまた、「近い距離」たることを利した、『山路』の「したたか」な手法と考えられるだろう。そうあってみれば、『山路』は、物語自体も、その語り手も、敢えて『源氏』の「物語世界」に「近い距離」にあることで、『源氏』否認を企図する作品であることにならないか。『山路』は、いわば、

様々な角度から『源氏』の懐に飛び込みつつ、その内側から相対化を図るのであり、『源氏』に「近い」ことを『源氏』否認の手法として駆使するのである。

さて、かように辿り見た時、『山路』の「序」Aにおいて、それが明らかに『源氏』竹河巻の「序」アを踏まえたものでありながら、そこで設定される「後続の物語」の語り手が、竹河巻のそれと遠近対照的である意味が感得されよう。そもそも、『源氏』竹河巻は、匂宮巻の、恋に消極的な薫像に対するアンチテーゼとして、恋に積極的なそれを呈示しつつ、宇治十帖における薫の恋物語の布石となる意義を有しており、そのためにも、出生の秘事に苦悩する薫を知り得ない語り手が要請されたとも言われる巻である。^(注23)つまり、『源氏』においては、薫像の二つの様態を異なる語り手の視線を利用して形象する方法が採られているのであり、竹河巻にあつては、即ち、匂宮巻の薫像の相対化を図るべく、殊更、薫らから遠い距離の語り手が設定されることになろう。『山路』の『源氏』理解が広範且つ細部に亘る事実^(注24)に照らすに、竹河巻の、さような薫像や語り手の特徴を看過するとも考えにくく、だとすると、『山路』は、かような『源氏』の、いわば、方法としての遠い語り、それ自体を否定しているのではないか。『源氏』竹河巻は、薫から遠い距離の語り手を擁することで恋に積極的な俗なる薫像を提起しつつ、そのことを通して匂宮巻の薫像を相対化する。対して、『山路』は、薫に「近い距離」の語り手を擁することで薫のあるべき浮舟の求め方を提起しつつ、そのことを通して『源氏』終局のあり方を相対化する。いずれも、薫像に纏わる問題の提起と関わって「先行の物語」の相対化を図り、そのために薫らに対する語り手の視座を利用する構図となっている。それぞれの語り手のもたらす効果自体は同様であるにも関わらず、『山路』はその視座についてのみ、薫らに「近い距離」へと更改^(注25)した。

そうあってみれば、『山路』は、竹河巻を下敷きにしつつ、敢えて「近い」語りを仕組むことで、ここでも『源氏』の施した「方法としての遠い語り」に対し、アンチテーゼを提出しているのではないか。薫を熟知しない「遠い」語

りを通して匂宮巻の薫像を相対化する『源氏』竹河巻の方法に対し、またもや異説を提起しているのではないか。つまり、『山路』は、さような語り手の仕業と工作せねば薫像を相対化し得ない『源氏』の、思えば、これも「無責任」な語りの「方法」、それ自体を否認しているのだ。『源氏』の薫像の相対化は、『源氏』、『山路』双方の薫を知悉する語り手によって責任を持つて成されるべき、と『源氏』に対し、『山路』は、重ねて異見の主張を試みているのである。^(注27)

『山路』の「近い」語りは、『山路』の思想に基づいて、あるいは、それと密接に関わって、いずれも効を発する、如上、「したたか」な二重の相対化の営為であった、ということになるだろう。

おわりに

前節序盤、旧稿を踏まえつつ、『山路』が最小限の敷衍を以て『源氏』のあり方の相対化を図る「したたか」な創意である旨に言及した。『山路』の、『源氏』からの僅かな展開が、実に効果的に『源氏』否認へと収束し得ているからであるが、思えば、『山路』の「後続の物語」が展開する以前、「序」Aにおいて「後続の物語」の語り手が設定される段階で、既に『山路』は、その思想と二様に連関する形で、『源氏』の内側からの相対化を試みていたのであった。『源氏』否認の物語を語り出す前から、既に『源氏』否認が成されていたとするなら、そして、『源氏』の語りの「方法」否認が成されていたとするなら、これ以上に「したたか」な語りの手法はないのではなからうか。

注

1 引用の『山路の露』本文と頁数は、笠間書院『中世王朝物語全集』本（底本は『絵入源氏物語』承応三年版本。いわゆる第一類本。）に拠る。なお、小川陽子氏「伝本二類の相互関係」、二類本の派生とその性格（『源氏物語』享受史の研究 付『山路の露』『雲隠六帖』校本）笠間書院（平成21年）が、第一類本に拠る意義を考える上で示唆に富む。

2 引用の『源氏物語』本文と頁数は、岩波書店『新大系』本（底本は大島本。浮舟巻のみ明融本。）に拠る。『山路』のそれらとの弁別のため、『源氏』の巻名を付し、（□□巻○○頁）の形式で掲げる。

3 注1の『中世王朝物語全集』本の小見出しに「序」、注2の『新大系』本の脚注に「語り手の前口上」とされるのに従う。

周知の通り、『山路』は①「序」Aと、②薫らの様子を「くはしう見ける人」が「書き置いた」後続の物語」とで、また『源氏』竹河巻は、③「序」Aと、④薫らの様子を見聞した鬚黒郎「悪御達」が「問はず語り」した「後続の物語」とで、いずれも構成される。即ち、それぞれ単独で成立していた②④に、それを紹介するための①③が後から付置される体裁をいずれも採るため、必然的に、①②にはそれぞれ別の語り手が、③④にもそれぞれ別の語り手が配されていると前提されよう。なお、②は「書き置いたもの」とされているが、「かうあやになるにや、かたへはまた過ぎにし方、悔しき御癖添ふこともあらんかし」（二六五頁）等、随所に見られる、いわゆる草子地などにも窺える通り、②も「くはしう見ける人」その人が他者に語るかのごとき、『源氏』にも酷似した文体で記した、いわば、擬似的な語りの下に成っているとおぼしいため、本稿においては、敢えてこれも語り手と呼ぶ。

また、④の場合、例えば、玉上琢彌氏が「源氏物語の読者―物語音読論―」（『源氏物語研究』角川書店 昭和41年）において、伝承過程の入れ子構造（a「作中世界」↓b「語り伝える古御達」↓c「筆記・編集者」↓d「現存物語本文」）↓e「読み聞かせる女房」↓f「観照者（姫君）」↓g「fの符号は稿者に依る。」の呈示に関わって、『源氏』中にcを批評するeの言辞が混入しうる、とされること（但し、氏の御論中には触れられないが、eとfの間に、それら「eの言辞」を含んだ、いわば、新しく増長した「現存物語本文」たるd、d'が、混入の都度、生成することになろうし、また、そもそも『源氏』の作り手が「一人芝居」を演じることく（星山健氏「竹河」巻論―「信用できない語り手」「悪御達」による「紫のゆかり」引用と作者の意図―『王朝物語史論』引用の『源氏物語』―平成20年、「eの言辞」を含む段階までの本文を案出した可能性は極めて高い。改めて考えねばなるまいが、玉上氏の想定されるd・e・fの関係については修正が求められようか。）を敷衍するならば、③の語り手の評言が④に混入していることもあり得ようが、この問題は、『源氏』の語りの方法論全般とも関わるため、稿を改めることとし、本稿においては、④には、あくまで「悪御達」の語りのみが一貫して反映しているものと見做す。

蛇足ながら、②は「書き置」かれたものとされるゆえ、①の語り手は、『中世王朝物語全集』本に「その草子の記述内容を、お目にかけてましよう」との解釈が付される通り、それをそのまま見せる形で紹介した、と捉えるのが自然であろうから、②に①の語り手の評言等の混入はないものと考えておく。

なお、本稿で主に扱うのは、②④の「語り(手)」である。①③のそれらに言及する時は、「序の語り(手)」と記し、区別するものとする。4 注3に則り、また、本論中にも述べる通り、Aに「後続の物語」の語り手は「くはしう見ける人」、Aに「後続の物語」のそれは「悪御達」と見做す。

5 『山路』について、「先行の物語」とは、常識的には『源氏』宇治十帖、就中、薫と浮舟を巡る、いわゆる浮舟物語であろう。『源氏』竹河巻について、「先行の物語」とは、竹河巻の物語自体が、「紫のゆかりにも似ざ」る、「源氏の御末々」に係る物語とされていることから、直接的には匂宮巻の物語が主に想定されよう(森一郎氏「竹河巻冒頭の方法」『源氏物語の主題と方法』桜楓社 昭和54年)。「竹河巻の人物造型と語り手」悪御達」及び作者」(『源氏物語の主題と表現世界—人物造型と表現方法—』勉誠社 平成6年、篠原昭二氏「竹河の薫—薫論(1)」『講座源氏物語の世界』第七集 有斐閣 昭和57年)等)。

後者に関わって、後に本論中にも触れるが、周知の通り、匂宮巻の薫像が恋に消極的であるのに対し、竹河巻のそれは反対に積極的であることが問題視されてきた経緯がある。

6 原岡文字氏「山路の露物語」(『体系物語文学史』第五卷 有精堂 平成3年)、土方洋一氏『山路の露』と物語史」(『物語史の解析学』風間書房 平成16年)、横溝博氏『山路の露』の成立—「建礼門院右京大夫集」『正治初度百首』との関わりをめぐって—(『平安朝文学研究』第十五号 平成19年3月)、小川陽子氏「浮舟の造型と物語構成」(注1の御著書)等。

7 小川(岡)陽子氏『山路の露』における浮舟の呼称表現—『源氏物語』続編としての物語の方法—(『古代中世国文学』第二十号 平成16年1月)

氏は、『山路』における「後続の物語」の語り手について、『源氏』世界をも経験したと思われる人物」との表現で説明される。

なお、氏の使用される『源氏』世界」の語に倣い、本稿もひとまず『源氏』『山路』の「物語世界」と表記するが、本稿においては、同タームを、便宜上、両物語内のそれぞれ諸要素によって構成、醸成された仮の人間社会の総体、とこれもひとまず把握し、やや幅の広い概念として用いるものとする。

8 小川陽子氏は、注6の御論考において、『山路』の「序の語り手」についても薫方の情報を保証しうる人物が設定されていると説かれる。薫の言動を知悉する人物ということになり、即ち、これもまた本論中に言う「薫に近い距離」の人物たる可能性も出てこようが、本稿に

おいては、その可否については判断を保留する。

- 9 拙稿 (i) 『山路の露』喪失する薫 横川僧都が還俗非勧奨であること (一) 『むらさき』第五十五輯 平成30年12月、(ii) 『山路の露』転換の論理—方法としての喧騒と決定者としての薫— (『中古文学』第一〇四号 令和元年11月)。

- 10 注9の拙稿 (i)。

11 中将君の前提する「忍びて」が、薫に知らせた上でそれ以外の者達に「忍びて」なのか、薫にも「忍びて」なのか、Bの本文からは不分明ではあるが、無論、仮に中将君が三条への浮舟引き取りを強行するとしても、前者であれば、そもそも薫は匂宮らを含めた人目を憚るべく「近きわたりの山里」を候補地とするのだから、即刻薫に諫止されようし、また、後者であっても、中将君と浮舟の再会に、薫に仕える右近も同行している以上、中将君の意向は早々に薫に伝わりうから、これも直ちに薫に制止されよう。つまり、実際に中将君が薫の意向に反して浮舟引き取りを完遂できるとは考えにくい、今は、中将君が、『源氏』当時に比し、明白に薫に反抗的、対峙的な人物としてあることを強調しておく。

なお、『山路』大尾、浮舟の元に、薫、中将君双方から同種の贈物が届くこと (三〇八〜三〇九頁) も、浮舟を挟み、薫と中将君とが対峙的關係にあることの徴表と見るべきかもしれない。別途、検討したい。

- 12 注9の拙稿 (ii)。

- 13 注6の原岡氏の御論考、本位田重美氏『源氏物語山路の露』解説 (笠間書院 昭和45年)、小川陽子氏「小君と右近の造型」(注1の御著書) 等。

14 注9の拙稿 (ii)、あるいは、一部、本論中にも述べた通り、『山路』に至り、薫を取り巻く環境は『源氏』当時から変化していくが、そのような中でも浮舟との再会を実現し、以降も変わらず浮舟を求め続けることで、結果、薫は「浮舟の未来」決定の責を担う立場へと移行する。これにより、『山路』においては、いわば、責任ある薫像が表面化し強調されることになるが、一方で、必然的に『源氏』終局の「無責任」な薫像は潜在化することにもなる。薫像について、ここに用いる「相対化」とは、『山路』の施す、斯く「表面化」に連動する「潜在化」の謂であり、『山路』が薫の属性の一部を取り捨てて「無責任」な薫像自体をその「物語世界」から廃した、と述べているわけではない。

なお、もとより「薫像」とのチームは、局面毎、場面毎の薫の象られ方を個別的、分析的に指す場合も、あるいは、それらの集積体として成る、例えば、『源氏』全編を通じての薫の象られ方を全体的、総合的に指す場合もあり得よう。いわば、ミクロ、マクロ両様の観点で施用しうるチームであろうが、本稿においては、主に前者の観点として適宜用いるものとする。

- 15 例えば、『山路』の信仰を重視する姿勢を称して、宗教志向の思想、と総括することがあり得ようが、本稿においては、『山路』に係る「思想」の語を、あくまで「先行の物語」たる『源氏』やその物語展開に対する『山路』の捉え方、あるいは評価の謂として用いる。
- 16 原豊二氏「偽作（上）——『山路の露』」（『人物で読む『源氏物語』』第十二巻 勉誠出版 平成18年）
- 17 注13の小川氏の御論考。
- 18 『山路』の、『源氏』との懸隔に注目する先行研究として、注6の横溝氏、小川氏の各御論考や注9の拙稿（i）、（ii）の他、河原桐子氏『山路の露』の構想に関する試論（上）——再会をめぐる薫と浮舟の心情に着目して——（『解釈』第三十六巻第七号 平成2年7月）、湯川直美氏『山路の露』の文学史的位置について（『語文研究』第八十九号 平成12年6月）、野村倫子氏『山路の露』の表現性（『源氏物語』宇治十帖の継承と展開——女君流離の物語——和泉書院 平成23年）、横溝博氏『山路の露』の浮舟と和歌——手習の君の継承をめぐる——（『国文学研究』第七十七集 平成27年10月）等を例示しておく。
- 19 なお、『源氏』に比して『山路』が薫最貞の語りに変じているとする御見解もある（注6の原岡氏、土方氏の各御論考等。）が、「薫最貞」を、薫を否定的には捉えないことや、それゆえ偏つて魅力的、理想的に描き換えることの謂とするならば、一部、本論中にも述べた通り、『山路』は必ずしも「薫最貞」ではない、と思われる。
- 20 無論、『源氏』と一連でない「人物も空間も別個の他作品」も、『源氏』のアンチテーゼとして機能しうる。例えば、『狭衣物語』における狭衣の即位は、光源氏同様の王権具有者狭衣を帝位に据えることで、それが成されない『源氏』に対する批評となり得ている旨、既に御指摘がある。詳細は、鈴木泰恵氏「（声）と王権 狭衣帝の条理」（『狭衣物語／批評』翰林書房 平成19年）を参照されたい。
- 21 但し、注19のような、光源氏が即位しないことに対する批判であるならば、『山路』のごとき「続編」の体であつては、光源氏がいずれかの時点で即位を果たしていたとするには、相人予言（桐壺巻二〇頁）等や藤裏葉巻以降の叙述内容などとの齟齬を解消せねばならず、極めて大きな困難が伴おう。『山路』にあつては、あくまでも『源氏』終局に係るアンチテーゼゆえ、「続編」が有効であつたということになるだろう。
- 22 注9の拙稿（ii）。
- 23 注18の湯川氏の御論考、注6の土方氏、小川氏の各御論考、神田龍身氏「擬作の巻々——特に「単守」について——」（『源氏物語講座』第八巻 勉誠社 平成4年）等。
- 但し、「戦略」の語は、小川氏の御論考に拠つた。
- 注5の森氏の御論考二編。氏は、「竹河巻の世界と方法」（注5の御著書『源氏物語の主題と方法』）においてもこの問題について分析

しておられる。また、三田村雅子氏は、「第三部発端の構造——（語り）の多層性と姉妹物語——」（『源氏物語 感覚の論理』）有精堂 平成8年）において、悩みを抱えた貴公子として理想的な出発を遂げた匂宮巻の薫像への理想視を止めることが竹河巻で求められているとされ、匂宮巻の薫像を相対化する竹河巻の意義について説いておられる。更に、池田和臣氏は、「竹河巻と橘姫物語試論——竹河巻の構造的意義と表現方法——」（『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院 平成13年）において、竹河巻の薫像を、宇治十帖中、特に権本巻のたゆたう薫像から総角巻の行動するそれへの推移に参与するものとして位置付けておられる。

なお、竹河巻のみならず、匂宮三帖の意義として、「宇治十帖における薫の恋物語の布石」以外にも、むしろ『源氏』第二部との繋がりの観点から、光源氏への讚美、追悼、鎮魂等を指摘する御見解もある（神田龍身氏「匂宮三帖の再評価——王朝時代への挽歌」、『新講源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社 平成7年）、陣野英則氏「光源氏の物語」としての「匂宮三帖」——「光隠れたまひにしのち」の世界——（『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版 平成16年）、湯浅幸代氏「薫の孤独——匂宮三帖に見る人々と王権——」（『源氏物語の史的意識と方法』新泉社 平成30年）等）。

但し、『山路』においては、明らかに浮舟物語を主に承ける形ゆえ、本稿においては、『山路』が、竹河巻の「序」アを、「宇治十帖における薫の恋物語の布石」たる「後続の物語」の、文字通り「序」として捉えていた、と考えておく。

24 三谷邦明氏「源氏物語第三部の方法——中心の喪失あるいは不在の物語——」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂 平成元年）

25 注13の小川氏の御論考、注9の拙稿（ii）等。

26 「悪御達」とされる竹河巻の「後続の物語」の語り手が匂宮巻等の語り手よりも薫らから「遠い」ことは明らかであるが、それと対偶関係を成すごとくに『山路』の「後続の物語」の語り手が『源氏』浮舟物語の語り手よりも薫らに「近い」、と説いているわけではひとまずない。注16の御論考において、原氏が『源氏』の語り手と同化する『源氏』偽作群の語りの特徴について指摘されるが、本稿においても、差し当たり、『源氏』浮舟物語の語り手と、少なくとも同等の「近い距離」にある語り手を前提するものである。

但し、『源氏』の語り手としては、例えば、光源氏らの行動を「見ん人」（夕顔巻一四六頁）とあつて、「見し人」や「見ける人」ではない点、また、伝承過程に、「語り伝へけむ、人のもの言ひさがなさま」（帚木巻三三三頁）、「問はず語りしをきたる」（竹河巻二五二頁）等と、口伝が含まれている点などに鑑みるに、『山路』の語り手が「くはしう見ける人」で、また、「あはれに忍びがたくおぼえけるままに」（中略）書き置き待る（二二六二頁）と、同語り手が実見したことの感動のままに筆写した形での伝承となっていることは注目に値しよう。物語内容の「信憑性」を、『源氏』浮舟物語 以上のものとして演出すべく、『山路』が敢えてさような伝承方法を探った可能性をも想定すべきかもしれない。『源氏』浮舟物語の語り手よりも薫らに「近い」「可能性も含め、改めて検討したい。

27 直接的には『源氏』終局とも浮舟とも無関係に映る『源氏』竹河卷の「方法」にまで、『山路』による相対化が及ぶことを思うに、『山路』の、『源氏』に対する否定的発想の射程は、本稿に述べた『源氏』否認の範囲を大きく越えている公算も出てこよう。他の諸問題とも併せ、再検討したい。

〔付記〕『山路の露』転換の論理」補訂

「中古文学」第一〇四号（令和元年11月）所収、右記題目の拙稿（注9（ii）に同じ。）について、103頁（下段）22行目、「女御子」を「女子」と訂する。

当該稿で用いた「御子」の語は、全て「お／こ」、「おん／こ」との読みを想定し、時の内大臣薫と今上帝女二宮の子としての、生来の重要性を表したものであった。しかし、その性別に言及する部分において、迂闊にもそのまま「御子」に「女」を付加し、「女御子」との表記を採ってしまったことは問題であった。かかる文字列の場合、用例を警見する限り、その読みは「おんな／み／こ」となることが通常であり、従って、皇女の謂になってこよう。同稿の主旨からは、是非にも「女子」等の表記であるべきであった。二校入稿後に漸く気付くという己が不明を恥じつつ、ここに修訂する次第である。